

釣りに釣られて

高原英夫

第二回 「井伏鱒二も開高健も」

「オーパ！」と題する写真集は一九七八年に集英社から発行された。南米では何であれ驚いたり感嘆したりするとき、この「オーパ！」と言うのだという。ズドンと響く題名もそうだが、私にとってはあの開高健の作品だということが、歯をむきだし、ピラニアの頭を大寫しにした高橋昇カメラマンの表紙とともに驚きだった。

開高健といえば、高校生の時に「ベトナム戦記」を読み、その強烈なイメージを持ち続けていただけに、意外な感じも混じり合いはしたが、当時二千八百円もした豪華本に近い本だったがすぐ買い求めた。

私は「ベトナム戦記」に触発されたこともあり、大学へ行っても「ベトナム戦争反対」とデモを続けていた。学校閉鎖で休校ばかり、四年間の大学生活ではあまり勉強した覚えがない。バイトとデモとマージャンで、卒業の単位もやっと取ったという状態で、ひとつでも不可があると留年というすれすれの学生生活だった。

青森市内の会社に入り、近場の木材港へ行ったり、堤川河口へ行つてアブラメを

上げたりした。そして八戸へ転勤し、船釣りを始めた頃だった。だから何か、ベトナム戦争と釣りが、どこか絡み合えないところがあつたのだが、「オーパー」を読んでそうした境が一気に融け合つた気がした。

アマゾン川にはピラルクーという魚がいるという。この魚は鱗のある魚としては淡水魚中最大だという。最大は四・五〜五メートルにもなり、体重は二百キロにもなるのだという。舌はおろし金にもなり、鱗は、大工はヤスリに美容師は女の爪磨きに使うのだという。ドラドという全身が黄金色に輝くサケそつくりの魚がいて、彼はそいつをルアーで釣り上げる。四十六歳、開高氏の饒舌かつ豪壮絶妙な語り口は、私を地球の裏の河へと誘つてくれた。

この写真集を開くと、すぐに、

一時間幸せになりたかつたら酒を飲みなさい

三日間幸せになりたかつたら結婚しなさい

八日間幸せになりたかつたら豚を殺して食べなさい

永遠に幸せになりたかつたら釣りを覚えなさい

と中国の古諺として大書きしてある。

気に入った。三十数年間、釣り仲間と飲めばこの古諺がついつい出てくる。ただ、講演に来た上海出身の中国人にこのことを尋ねてみたが、本人は知らないと言って西安の歴史に話を移した。

開高健は、五十八歳の若さで一九八九年の十二月九日に食道癌で亡くなっている。私はもうとづくにその歳を超えてしまっている。私はずっと、「永遠」に幸せになりたかったらの文言を、「一生」とまちがえて覚えてきた。改めて読み直して、「一生」と「永遠」ではやはり違う。一生を超えて永遠でなければ、開高健の残りの幸せは短かすぎる。彼は文章に釣りの幸せ——永遠を残してなお生き続ける。その点でいえば私などは、暇潰しをしているだけであり、釣りの持つもつと広い、行動的な、全地球的な釣りの話など、本の中の世界での事ではない。他人を通じてしか経験できない。

この機会にと思い、改めて書棚をかき回してみると、一九七四年「フィッシュユオン」が新潮文庫から、「私の釣魚大全」が一九七八年、文春文庫から出ている。そし

て一九八三年には「オーパ！」の続編ともいえる「もつと遠く！」上下巻が文春文庫から発行されていて、なんと私は買い求め、読んでいた。

私は「オーパ！」を読んでから感じる所ありで、後戻りして、「フィッシュオン」「私の釣魚大全」を読んだのだった。しかも「私の釣魚大全」では、田代高原のグダリ沼のイワナ釣り、小川原湖の河口でのスズキのルアー釣りがつづられていた。数ページとはいええ、改めて開高健がその辺にまだいるような感じを持ち続けてきた。また後にテレビで、モンゴルに行きイトウを釣る特番をやっていたが、川の中で反転し腹をにぶく光らせる魚を見て、

「イトウだあ」

と叫ぶ、開高健の声が今でも強烈に耳に残っている。

つまり、釣りという行為と、漁という行為が、この本の中ではつきり別れていたのだった。私なんかエサのつけ方ひとつにしろ、てんでまだまだ素人だと思っっている。だから漁もすっかりしたいのだが、釣りの楽しみを敢えて行為などといって強がついているところもある。

釣り仲間は、しめし合わせた休日とか無理に合わせて取った休みを、小学校に行っていた頃の運動会の前夜の興奮としてまず楽しむ。大漁したからといって近所に配ったりするだけで、卸してお金にするわけでもない。だからよく言われるように、船賃出すくらいのお金があれば市場で買ってくればという話になるが、それは当たっていない。それは大漁のほうがいいに決まっている。それはそうだが釣れなかつたからといってそれでめげてはいない。釣りをしている行為にたまに漁がおまけについてきてまた行きたくなる。これが小説家の手にかかると、南米でもモンゴルでもと、そこまではできない我々の夢の実現者として、我々に夢と竿に感じる魚の動きまでも伝えてくれる。費用とか時間をとつぱらって、夢で世界を駆け巡る。「オーパ！」は時代の変り目なのだった。

もつとも何度もういが、私自身、いまだに、アラスカのオヒョウを釣り上げ、最後はライフルで撃つて仕止めて、ドアをはずしてマナ板にしてさばきたいとか、いろいろ思うのだが、いたって青森ばかりにいて、それはそれ、我は我で釣りを楽しんでるわけで、不満があるわけでもない。

陸奥湾のカレイのシーズンが花見どきから始まる。前の年のシーズンの終りに、一応洗ったり針を付け替えたりして仕舞っていた仕掛けを取り出し改めて見てみる。すると針が錆びていたり、テグスにキズが見つかる。これを次の釣行を思い浮かべながら、作り直していくのである。この蛍光ビーズだったら海の底でどう光るのだろうか。このハリスは、太すぎやしないか。そこですでに釣りが始まっている。船べりでこれまでに経験したあの時の思いが、脳の中を駆け巡り、ハリスがほんの数センチ長かつただけで、結び直して作り直すのだ。

ところで、開高健の師匠 井伏鱒二に、岩波新書から一九五二年初版が出て、一九八二年には第三十三刷発行となっている「川釣り」という名著がある。その「まえがき」で、海釣りの達人から井伏への言葉として「十年釣りをして三行書け」と言われたと書いてある。私もこんまい釣りを三十数年はやってきたので、せいぜい九行は書く資格があるのだろうか。ましてや大作家の話の事である。

また、同じ本の中で開高健も書いたグダリ沼での釣りの事も書いている。

釣りには、その仲間内でしか通じない体感言語とでもいうのがあるのだろう。「川

釣り」の本の中で、魚を釣り上げビクに入れてもまだ跳ねていて、興奮して手が震え思うようにならず、エサを針にさすのに、岩に両肘をつけてさす、というような文がある。わかる。わかる。絶対にわかる。機会があつたら是非一度読んで欲しい。釣り師だったら誰でもわかる。しかも、あの大作家 井伏鱒二大先生でさえもである。

だからやめられないのだ。

平成22年12月